

過去の地震から知る、未来の備え ～家の中に閉じこめられたときには

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■家の中に閉じこめられたが、助けは来なかった。外の声は聞こえるのに、中から叫んでも外に伝わらない。結局、地元の消防団に助けられたのは、地震から5時間近くが経った朝の8時過ぎだった。(宝飯郡形原町(蒲郡市形原町)三浦美恵子 さん・佐野辰雄 さん)

家の一階がつぶれて、家族全員が閉じこめられた。ただ二階の部分が残っていたもので、「このうちはしっかり立っとる」って誤解されてね。

声を上げたけど、外の声は聞こえるのに中の声は届かない。しばらくして、うちのみかん畑に避難した人たちが「このうちは、誰も出て来やせんが」って言って、ようやく気づいてもらえた。

消防の人たちが「どこに寝とるだ、どこに寝とるだ」って、つぶれた家から私たちを探し出して助けてくれた。もうその時には夜が明けていたね。



絵 藤田哲也

家に閉じこめられてしまったとき、私たちはどうしたらよいのでしょうか。1995年阪神・淡路大震災のあと、日本火災学会が「実際に生き埋めになったり閉じ込められたりしたときに、あなたは一体だれに助けてもらいましたか」という調査をしました。その結果、「自力で脱出した」という人が34.9%、「家族に助けられた」人が31.9%、「友人・隣人に救助してもらった」人が28.1%でした。

なお、「救助隊に助けられた」人は1.7%でした。これは、消防の対応能力を超える生き埋め者が一度に発生したため、119に電話をかけても回線が混み合っつながらず、また運良く電話がつながって出動できたとしても、細い道に入るとガレキの山で救急・消防の特殊車両が現場に到着することができません。また、消火を必要とするときには、消火栓がガレキの下になっていたり、避難する人々や車(!?)がホースを踏んでしまい、消火作業が進みませんでした。

災害対応の担い手として、自助(自分・家族)、共助(隣人・地域)、公助(行政や公共機関など)の三つが挙げられますが、「実際に地域で被害が起こってしまうと、救助・救出に関しては自助か共助しかない」というのが過去の災害が残してくれた貴重な教訓なのです。

これらの教訓をもとに私たちに考えられる対策は「地域での安否確認の実施」です。町内会や自主防災組織が中心となって、特に1人暮らしや2人暮らしの高齢者など「自助」の活用が難しい地域住民の安否を組織的に確認することが、「いのちを守る」効果的な対策になります。

また、地震後、さまざまな音や声 that 交錯する騒然とした環境の中で、家の中からの声は外にはなかなか伝わりません。そこで小さな力で大きな音を出ることができる「笛」や「手回し充電式の懐中電灯・ラジオなどに付属しているサイレン」などは、自分の居場所や異常を知らせる大切な手段になります。ぜひ就寝場所の周りに備えておいてください。